

# Glocal Tenri



月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.14 No.9 September 2013

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

9

## CONTENTS

- 巻頭言  
銃無し社会へ  
／深谷忠一 ..... 1
- 天理教教理史断章 (74)  
家城文書③  
／安井幹夫 ..... 2
- 天理教伝道史の諸相 (21)  
北陸の天理教  
／早田一郎 ..... 4
- 「おふでさき」の有機的展開 (17)  
第三号：第六十八首～第七十二首  
／深谷耕治 ..... 5
- フランスで育つ日本人の子供たちへの  
日本語教育 (9)  
天理日仏文化協会こども日本語講座の  
取り組み⑨  
／田中久代 ..... 6
- 新宗教のブラジル伝道 (5)  
キリスト教の変容②  
／山田政信 ..... 7
- 「いのち」をつなぐ一生死の現象 (21)  
死者と生者の間に②  
／堀内みどり ..... 8
- ノーマライゼーションへの道程 (19)  
福祉のまちづくり⑥  
／八木三郎 ..... 9
- 図書紹介 (78)  
『カミングアウト・レターズ 子どもと  
親、生徒と教師の往復書簡』  
／深谷耕治 ..... 10
- English Summary ..... 11
- おやさと研究所ニュース ..... 12  
第50回社会福祉セミナーに参加／English  
Summary (続き)／平成25年度公開教学講座開  
催のご案内

## 巻頭言

### 銃無し社会へ

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

先月号で書いた元米海軍将校の女性のご主人は、米国でも高名な弁護士でした。ハーバード大学が彼のためだけに作った「税金学博士」なる称号を含めて3つの博士号をもつ彼は、各専門分野の全米トップクラスの弁護士15人を抱える事務所をビバリーヒルズで開業していました。

彼は「どの公判にも後輩・教え子の判事や検事があるので、私が意見を言えばそれで判決の方向が決まります。それではアン・フェアなので、自分はもう法廷には出ないのです」と、司法の場さえ思いどおりになるかのごとくに言っていました。その彼が、三叉神経痛の病におかされた時は勝手が違いました。強力な人脈を使って全米中の有名な医者にコンタクトしたのに、誰も彼の痛みをとることが出来なかったのです。それで、彼は現代医学に見切りをつけて、独学でメソジストの牧師になる資格を取得し、自宅近くの教会でスピリチュアル・ヒーリング(信仰治療)のグループを立ち上げたのでした。

毎週木曜夜のその会合に招かれた筆者は、専らヒーリングで手余りになる人に天理教の“おさづけ”を取次ぎ、種々不思議も見て頂きましたが、主催者の彼にだけは顕著な効果が見られませんでした。それで「日本の天理という聖地に参って奇跡を願おう！」と勧めたのですが、キリスト教の牧師であり、全米ホリスティック医療協会の副会長もしていた彼には、なかなかその決断がつきませんでした。そして、筆者が他の人と天理に帰っていた間に、痛みに耐えかねた彼が、護身用の拳銃で自らのコメカミを打ち抜いてしまったのです。これ以上ない理知的な人物が、常に愛や平和を語っていた彼が、自分の拳銃を持っていた。そして、その銃で自らのいのちを絶った。筆者には、それは大きな大きな衝撃でした。

米国は、現在でも国内に2億7千万丁(100人あたり89丁)の銃があるとされる銃社会です。そして、毎年多くの銃による自殺、幾度もの無差別乱射事件や射撃事件、係争による銃撃事件が起きます。ジョン・レノン夫人のオノ・ヨーコさんが、1980年にジョンが銃殺されて以来、米国では105万7千人以上が銃によって殺されたとブログに書いていますが、米国の銃での犠

牲者は、自動車事故での死者数を上回ります。また昨今では、平和で安全なイメージが強いスイスも、米国以上の銃社会になっています。国民皆兵制度のもとで、若い男性が退役後も銃を保管しており、その支給銃が自殺や犯罪に使われるケースが増大しているのです。

しかるに、米国でもスイスでも銃規制はなかなか進みません。銃擁護推進派は「銃を持ち法律を遵守する市民は、犯罪も防げる」とか「国家の危急時に市民が銃を持ってかけつけるから、独立・中立を守れる」などと主張し、それに多くの人が賛同するのです。

しかし、そもそも誰もが銃を持っていないければ、銃で襲うことも襲われることもない。銃がなければ、銃での自殺、乱射・誤射事件、襲撃事件は起きないのです。銃が簡単に手に入り身近にあるがゆえに、一時の狂気や一瞬の気の迷いで悲惨な事件が起きるのです。

“銃のない社会などありえない”と信じ込んでいる人たちの思いを変えるのは、とても大変なことです。しかし、銃社会より銃無し社会の方が安全だというモデルを示せば、銃規制・廃絶の一步が踏み出せるかもしれません。それが最も可能な国が日本なのですが、そのためには、日本社会も今以上の完ぺきな銃無し社会にする必要があるのです。

冒頭で述べた事件以後、我が家では、銃に関するものを一切排除しました。子供のおもちゃでも、拳銃や小銃はもちろん、たとえゴム鉄砲や水鉄砲でも、人を撃つものはダメ。戦車や戦闘機はもちろん、ロボットの類いでも銃がついているものはダメ。また、親指と人差し指で拳銃の形をつくって、“パーン”“やられた!”などと遊ぶのも、もちろんダメ。銃に関するものは全てダメにしたのです。

しかるに、今でも、油断をすれば、すぐにまた我が家にも銃関連の玩具等が忍び込んできます。現実には、テレビや絵本でのヒーローと怪獣の戦いを孫たちに見せない、というのも容易ではありません。しかし、銃は“よーい・ドン”の銃以外は、相手を狙い撃ちするもの。銃撃を想定したものは、全てこの世から無くしたい！それには先ず信仰者の家庭が率先して！と切に願っている次第です。